

狂 犬 病 予 防 接 種

日本ではもうなくなったと思われていた狂犬病は、実は海外ではそうとう発生しています。そして、もし発病すればほぼ100%死亡する怖い感染症です。

東南アジアなどへ出かける際には、あらかじめワクチン接種を受けておくようにして下さい。



予防接種の注意・お願い

予防接種を安心して受けるために、いくつかのことを心がけてください。

- 受ける予防接種について、病気のことやワクチンの効果・副反応などについて、あらかじめ知っていてほしいと思います。市町村からの文書や、育児書（雑誌）なども参考にしてください。分からないことなどがありましたら、会場の職員や医師にたずねてください。
- 健康状態の良い時に受けましょう。心配なときは無理せずに延期したり、医師に相談してください。
- 前日は入浴して、体を清潔に。
- 予診票は、良く読んで、きちんと記入しましょう。
- 母子手帳も忘れずに。（個別接種では、念のために保険証も）
- 接種の会場で、体温を測り、記入します。
- 予期できない重篤な副反応が、注射のあと15～30分以内におきることがあります。すぐに帰らず、しばらく会場で様子を見ていてください。
- 接種の当日は、入浴をふくめていつもと同じ生活でいいのですが、激しい運動はさけてください。



狂犬病は狂犬に噛まれたあとに発症する重症な感染症です。致死率はほぼ 100%。

日本では犬に対して狂犬病予防接種を徹底したために発生はなくなりましたが、このような国は日本以外にはイギリスなど、少数です。大半の国や地域では、狂犬病はまだとてもおそれられています。（世界では年間に数万人の死者がでていますし、犬に噛まれたあとに発病防止のためにワクチン接種を受ける人は 1,000 万人を超えているとのことです。）

日本の国内で居住している場合には、現在は狂犬病の心配はありませんが、海外に行くときには注意が必要です。とくに、東南アジア、中南米、中近東、アフリカなどへ長期に旅行、あるいは在住する場合には、あらかじめ予防接種を受けておくことをお勧めします（暴露前免疫）。

なお、日本でも犬などに噛まれた時には、そこから雑菌が入ることがあるので、消毒を丁寧にすることが必要です（その場では流水で傷の中まで良く洗うこと）。3 日間は縫合せず、消毒を繰り返すようにして下さい。また、時には破傷風に感染するおそれがありますので、医師の指示に従って下さい。

狂犬病の予防接種

任意接種

使用ワクチン：ラビピュール筋注用

予防的な接種【暴露前免疫】

3 回接種（0 日、7 日、21 日または 28 日）

受傷後の発病防止【暴露後免疫】

4 回接種（0 日＜2 回＞、7 日、21 日）

5 回接種（0 日、3 日、7 日、14 日、28 日）

6 回接種（0 日、3 日、7 日、14 日、30 日、90 日）

※ 1 回目接種日を 0 日とします。

※ 他の狂犬病ワクチンとの互換性はありません。

※ 狂犬病の発病阻止（暴露後免疫）のための使用した場合には保険給付がされます。

予防接種を受けたあとの注意

※ 予防接種の副作用として、ごくまれに、注射の直後に急に具合の悪くなることもあります（アナフィラキシー・ショック）。万一のために 15 分程度は医院の中にいていただき、そのあともしばらくは医院にすぐひきかえせるようにしてしてください。（その場で適切な処置をすれば、最悪の事態はさけられます。）

※ 狂犬病ワクチンには安定剤としてゼラチンを含有しているため、アレルギーのある方には慎重に投与する必要があります。

狂犬病ワクチンは不活化してあるワクチンです。

次に受ける異なるワクチンとの接種間隔は、とくに制限はありません。

狂犬病ワクチン

- ① 注射したところは、適度にもんでください。
- ② 今日には激しい運動は避け、普通の生活をして下さい（**入浴はかまいません**）。
- ③ 接種したあと、まれに丸 1 日以内に熱をだすことがときがありますが、ほとんどはそのままでおさまります。
- ④ 注射したところが、赤くなったり、はれたりすることがありますが、そのままでも数日でおさまります（程度の強いときには受診して下さい）。
- ⑤ 小児と大人の注射量は同じです。